OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多様性から学び互いに成長するグローバルヘルスの研究・実践・政策展開の醍醐味
Author(s)	中村, 桂子; 田代, 百合
Citation	目で見るWHO. 2023, 86, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

多様性から学び互いに成長するグローバルヘルスの研究・実践・政策展開の醍醐味

東京医科歯科大学大学院
国際保健医療事業開発学分野　教授
中村　桂子
WHO健康都市・都市政策研究協力センターの所長を兼務。
国際ネットワーク "The Alliance for Healthy Cities" 事務局長。

東京医科歯科大学大学院
国際保健医療事業開発学分野　博士研究員
田代　百合

研究室の沿革と教育研究の概要

東京医科歯科大学大学院には、2000年4月に国際保健医療協力学分野（Department of International Health and Medicine）が創設され、2016年4月からは、国際保健医療事業開発学分野（Department of Global Health Entrepreneurship）の名称となり現在に至ります。研究室の特徴は、日本人の学部学生、大学院学生やスタッフと、外国人の大学院学生やスタッフがともに学び、国や地域の健康課題、環境課題をテーマとする研究に取組んでいます。

2001年度から、東京医科歯科大学に「パブリックヘルスリーダー養成プログラム」という、世界各地で公衆衛生や地域医療の実践で活躍している人たちが博士課程に入学して研鑽するプログラムを開講しました。大学に所属してパブリックヘルスを学ぶ若手はもちろん、各国の保健省、病院、NGO、また国際機関などで、第一線の経験を積んだ人たちが集まります。ここに日本人の学生も参加し、パブリックヘルスの実践現場で遭遇する課題に着目し、課題の解決に寄与する研究に、共に取り組みます。現在は「データ駆動グローバルヘルス医科学研究国際人材育成プログラム」という名称ですが、引き続き、国際的に活躍するパブリックヘルスのリーダーを育成しています。留学生の多くは卒業後本国に戻り、各国保健省や国際機関、大学などの要職についています。日本人の卒業生は、大学、地域医療、行政、民間シンクタンクなどで活躍しています。

研究では、課題とそれを取り巻く条件について、多角的に分析し、エビデンスに基づいて解決策を検討するのはもちろんですが、課題解決の方策を考えるには、それぞれの社会が備えている課題のとらえ方、現存している課題へのアプローチの方法をよく理解することが必要です。短期間の調査地訪問や、第三者の立場での評価だけではわからない、その地域社会の仕組みと人々の行動様式と、その根底にある価値、考え方を少しでも理解できると、その社会で実践可能な解決方法が見えてきます。研究室では多様性から学ぶことを重視しています。

多様な関係者と取り組む共同研究からの学び

写真1　研究室のメンバーと卒業生の合同セミナー（2022年）

写真2　タンザニア大統領府 Regional Administration and Local Government (PO-RALG) オフィスにて実装科学研究うちあわせ（2020年）

写真3　アフガニスタン・ヘルシースクール調査チーム（2021年）

写真4　プラネタリーヘルス授業（2023年）

多様性からの学びは、在籍する学生の間だけでなく、卒業生も参加しての学びの場があります。卒業生が参加して実装科学研究を計画して取り組むということも行っています。たとえば、タンザニアで実施している高血圧・糖尿病患者の疾病管理の実装研究では、ドドマ大学の公衆衛生学部長の職にある研究室の卒業生は、研究課題についての現地の状況および現地政府の最新の政策について情報を提供しています。東京には、タンザニアからの留学生、国際保健で活躍を希望している日本人学生がおり、毎週オンラインのリサーチミーティングを開催して、国際共同研究活動を運営しています。タンザニアでの高血圧・糖尿病の患者管理の対策において、実装可能な新たな対策を国内で展開することを目指し、政府機関や学術組織の関係者を国際共同研究チームに招待し、現地の公衆衛生対策に寄与する研究成果を出すべく、取り組んでいるところです。（写真1,2）

日本の高齢者の医療福祉介護システムおよび人材育成技術をもとに、ASEAN諸国において高齢者ケアに従事する「医療職、福祉職のワーカーを対象とした多職種連携強化のための研修プログラムの開発」に取り組みました。フィリピン大学マニラ校とフエ医科薬科大学の教員、留学生、日本の高齢者ケアに関わる研究者が参加した国際共同研究に参加した大学院生は、大学院を修了したあとも共通した研究課題意識をもち、Fear of Falling、Skipped Generation Households、Active Aging Indexなど、注目される研究課題をあげて共同研究を継続しています。大学間の学術交流協定などの連携の組織化は、共同研究の推進に役立っています。

アフガニスタンでは、生活習慣病予防の教育を学校の子どもたちに届けるために、公衆衛生省と教育省の組織連携の仕組みをつくり、学校の先生を対象にした調査、研修評価を行いました。研究室の卒業生が中心となって研究体制をつくり、大学院生が調査に参加しました。（写真3）

ベトナムでは、急速なデジタル化の進行が子どもたちの健康にもたらす影響を、中学校の生徒を対象にしたコホート研究により明らかにしようとしています。疫学研究の確かな知識と技術、関係機関との信頼関係に基づく着実な研究体制の構築は、パブリックヘルス研究の技能を身に着けた、研究室の卒業生が核となって貢献しています。

修士課程「グローバル健康医学」

大学院修士課程には「グローバル健康医学」のコースがあり、全て英語で授業を行い、世界各国から入学する学生とともに切磋琢磨して修士論文の課題に取り組みます。公衆衛生学、疫学、生物統計学、ヘルスシステム、母子保健、環境保健、産業保健、プラネタリーヘルスなどグローバルな観点における公衆衛生学について習熟し、統計解析について高い知識と技術も修得します。現場からデータ収集を行ってデータを解析し、データに基づくパブリックヘルスの対応戦略を提案します。将来パブリックヘルスのリーダーとして活躍するために必要な知識と技術、そして社会課題に向き合い課題を解決する能力を獲得することを目指します。（写真4）

グローバルヘルスの醍醐味

グローバルヘルスの研究、実践、政策展開において、関係者の多様性から、新たな学びが多々あります。新たな学びをみつけ互いに成長することができるところは、グローバルヘルスならではの醍醐味であると考えています。多様性を尊重するグローバルヘルスの仲間を増やし、様々なネットワークとの接点をつくることは、国際保健の仕事を続けていくにあたり確かな糧になるものと思います。

（問い合わせ先）
whocc.ith@tmd.ac.jp
修士課程「グローバル健康医学」
https://www.tmd.ac.jp/cmn/mphgh/